

平成4年度
学術研究・演奏会助成の経過報告

「絵系図の基礎的研究」報告

西口 順子

本研究が目的とする中世後期～近世絵系図・名帳は、村落、家族（女性・子供）研究、民俗学、民衆肖像画研究の重要資料として、多くの研究者が関心をよせ、公開が期待されているが、膨大なため、一部紹介されたのみで殆ど未調査の状態であった。

今回の調査対象寺院は、①滋賀県蒲生郡竜王町川上光明寺、②浅井郡湖北町馬渡光源寺、③東浅井郡浅井町野瀬光福寺、④東浅井郡湖北町津里光照寺、⑤坂田郡米原町樋口明照寺の5ヵ寺で、絵系図・名帳、光明本尊、阿弥陀絵像、古文書等を網羅的に調査・撮影した。

調査寺院中、光明寺は、南北朝～江戸時代前期の絵系図を所蔵するが、寺絵系図と道場絵系図があり、年代的にはほぼ同時平行的に作成されたものと考えられる。保存状態がきわめて悪く、しかも継ぎ方が錯綜しているため復元作業は困難である。年代の明らかな肖像画として美術史的にも重要であり、中世絵画史研究者の協力をえて、さらに研究をすすめる計画であるが、同時に保存のための最良の方法を検討する必要があると考えている。光源寺・光福寺所蔵の絵系図については、量が膨大であるのと、現代も存続していることを勘案して、撮影は江戸時代末までを対象にした。

以上の寺院調査・撮影資料に基づき、今後、復元作業、原稿作成、調査記録の作成を行ったのち研究を公表したいと考えているが、周辺地域の寺院調査の必要があるため、当面は平行して調査を継続する予定である。

桂園舎文庫所蔵本の研究

中西 健治・千葉 真也

財団法人青山会（兵庫県多紀郡篠山町）の管理にかかる桂園舎文庫所蔵本のうち、古文書二号館に収められている主として和歌関係の写本、版本類約六百余点は、学界未紹介のものである。そのうちの冊子形態をとるものについては、近々目録が刊行されることになっていて、今後は研究者にひろく活用されることが期待される。また、冊子以外のもの、即ち、未整理の一枚文書、懐紙、卷子形態の料紙等を含めたものも調査し、整理しつつあり、将来的には目録を作成したいと考えている。未整理資料の豊潤さをその一端を示すことで証しておこう。「西行之絵草子詞書」四卷（飛鳥井雅章卿本の写し）、「堯然法親王和

歌三十首」一卷（天和三年の写し）「二十一代集 武家」一卷、「遠州一宮縁起」一卷等々。

米国における公教育統制主体の研究

小松 茂久

シカゴにおける公教育の実態と課題を中心として研究を行った。特に都市教育の課題と現代の教育改革をめぐる、誰が（あるいはいかなる団体、組織が）主体的に改革を担っているのかを明らかにすることは、改革内容のみならずそのもたらす影響を探る上で必要不可欠の作業である。このような観点から、シカゴの1988年における学校改革の内容とその評価について研究をすすめ、その成果は1993年1月に関西教育行政学会において「現代アメリカ大都市教育行政の改革問題——シカゴ学校改革を事例として——」と題した口頭発表を行い、この学会発表をもとに、同名のタイトルの論文が、金子照基編『現代公教育の構造と課題』（学文社1994年3月刊行予定）に収録された。

さらに、シカゴの改革に至る前史、すなわち、1988年に州議会を通過した学校改革法の制定過程における各アクターの意識や行動を中心として分析し、その成果は1993年10月に日本教育行政学会において「アメリカ大都市学校政治の一断面——シカゴ学校改革（1988年）の決定過程を中心として——」と題して口頭発表を行い、この学会発表をもとにしたのが本論集所収論文である。

演奏会経過報告

斎藤 達男

このたびは演奏会助成をいただき誠にありがとうございました。

以下ご報告申し上げます。

1988年以来、自主公演（チェロ・リサイタル）の構想をあれこれ描きながら1992年、その実現に至った。それまでの4年にわたるプロセス、即ち各種の依頼演奏会（ソロ、室内楽、オーケストラ等）によるステージ体験から得たもの、又奏法上の技術的研究、4年間のさまざまな精神的体験の推移による音楽作品に対する洞察の変化など、各要素の相乗的な高まりのなかで研究発表の場として自主リサイタルの実行にふみきった。

日時、場所については1992年6月9日、豊中市立アクア文化ホールに設定。秋の煩瑣な

演奏会シーズンを避け、弦楽器には不利な梅雨時分ではあるが、比較的聴衆動員が楽なこの時期を選んだ。又ソロ・リサイタルに適当なキャパシティ、音響的な問題および地の利など、いくつかのポイントから上記ホールに決定した。

プログラムについてはとくに一つの絞り切ったテーマを持たせることなく、バラエティ感があり、演奏会全体の進行の中でむしろ聴衆が耳にして楽しめ、又バランスのとれたものをと心がける。最終的に軸として、グリーグ作曲“チェロ・ソナタ イ短調”と、関西では演奏会にのぼる機会の少ない名曲、コダーイ作曲“ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲”を配し、その前後に古典的な作品と耳に馴染みやすい小品を用意した。

共演者はピアノを本学非常勤講師、辻本澄子氏に、ヴァイオリンを久合田 緑氏にそれぞれお願いし快諾いただいた。マネジメントは大阪アーティスト協会に依頼した。各方面の方々のご協力を得て、当日の動員数は約400名（うち招待客200名、なお客席数500）となった。結果についてはおききくださったひとりひとりの自由で率直な感想に委ねているが、演奏会に向けての一連の流れを含む研究発表という機会の中で学んだことは数えきれない。